

博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報



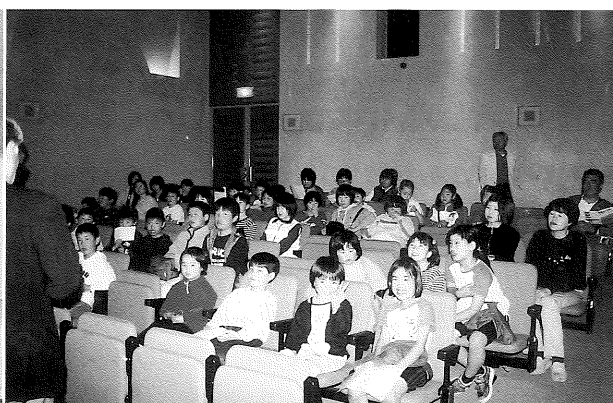
増え始めた「県内小中学校の校外研修」



子どもが大活躍「第1回砂金掘り大会」



誰でも使える「子どもコンピューター」コーナー新設



定着した「親子映画観賞会」

新年あけましておめでとうございます

それぞれの御家庭で晴れやかな新年を迎えられ、穏やかなひとときを過ごされたこととお喜び申し上げます。

昨年は、年間事業である博物館だよりの発行、毎年恒例の遺跡見学会、公開講座などに加え、学芸員実習生受け入れ、そして学校完全週5日制に伴う「こどもの居場所づくり」プログラムとして、子ども金山探険隊、砂金掘り大会など開催して参りました。これらの博物館でのイベントをひとつのきっかけとして、多くの人とのつながりが、たくさん出来

ました。これは館にとって、1年間の事業成果であると同時に、下部町にとってもかけがえのない財産が蓄積出来たとも言えます。

このかけがえのない財産を糧に、今年も多くの皆様に愛される博物館、同時に学術文化施設、地域活性化施設、子供たちの学習の場（受け皿）など多方面において博物館としての機能が十分に発揮出来るよう一層頑張ります。

4月には開館満5年、6年目を迎えますが、変わらぬ御指導・御協力がいただけますようお願いいたします。

湯之奥金山博物館の役割

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 谷 口 一 夫

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館は、平成9年4月24日、土橋金六町長のもと開館されました。この金山博物館は次の4つの役割を持っていますが、その一つひとつが大きな成果を上げています。

開館4年8箇月で8万3千人の有料入館者を迎えています。この人たちは下部町の大切な「親善大使」、この人たちの「口コミ」で、また、多くの方々下部町へやって来ます。

①日本の金山遺跡・金山史研究の

拠点としての博物館

日本における金山遺跡の総合学術調査は、山梨県における2つの金山遺跡が日本で最初の事例となりました。平成元年を中心に前3年間で黒川金山遺跡(塩山市)、後3年間で湯之奥中山金山遺跡(下部町)で実施されたものです。

金山史研究は、それまで文献史学者中心で研究が進められてきましたが、2つの金山遺跡の総合調査は文献史学・考古学・民俗学・鉱山技術史、地質学などの学際的な調査となり、金山遺跡の実態解明は格段な進歩を遂げました。

日本では西日本に銀山、東日本に金山が集中して存在していますが、日本における鉱山関係の総合調査は山梨県の2金山遺跡調査が最初で、その後の西日本の石見銀山や佐渡相川金山奉行所跡などの遺跡調査開始に大きな刺激を与えました。

湯之奥中山金山は我が国において、8世紀に宮城県涌谷で始まった砂金採掘に代わる鉱石から金を採る山金採掘金山の初源的金山として位置付けられ、その湯之奥中山金山遺跡に関わる重要な歴史事実や歴史資料が湯之奥金山博物館に保存・公開・活用されています。いわゆる金山のガイドンス施設です。

全国からの研究者の来館が多いのも、こうした研究の拠点的な博物館の機能を持っているからです。

黒川金山・湯之奥中山金山は共に、総合学術調査の結果、甲斐金山遺跡『黒川金山・中山金山』として『国指定史跡』に指定されています。中山・内山・

茅小屋の湯之奥3金山は同時代遺跡ですから、調査が進めば、今後、内山・茅小屋も国指定史跡の追加指定の可能性があります。

こうした国レベルで大切な金山遺跡を持っているのが下部町です。立派な学術的な裏付けを持った金山博物館を持つということは下部町や下部町民の文化レベルの高さを物語ります。

②生涯学習機関としての博物館

湯之奥金山博物館は、生涯学習機関としての博物館の機能を持ちます。

(1)知的好奇心を満たす博物館として、展示・公開・体験のほか「公開講座」「企画展」「特別展」「特別講演」「研究会」などを開催しています。町内外、県内外からの多くの参加者を迎えています。

(2)学校週5日制に伴う児童・生徒の受け皿機関としての博物館。

2002(平成14)年4月から、学校完全5日制に伴う土日の子供の受け皿づくりが迫られています。湯之奥金山博物館では3年前から、文部科学省の方針に従い、「こどもプラン」を研究し「こどもの受け皿機関」としてのプログラムを提供しています。

1、「こども金山探検隊プログラム」、文部科学省事業で、博物館から出された企画が採用されました。①中山金山を探検し鉱石を採集。②採った鉱石を粉成し(こなし=パウダー状にする)、比重選鉱法で金を採り、③灰吹き法で不純物を取り除き吹き金(純金)を作り、甲州金を作る。これら一連の作業を体験することで、こどもの「科学する芽」「創造する芽」を導き出すプログラムでした。最後は参加したこどもたちによる「自慢話大会」を開きましたが、こうしたことを通じて、自分の考えを発表出来る訓練もできます。

2、「親子映画観賞会」、家族・親子との触れ合いの場、友達との触れ合いの場として、博物館の

日常業務が終了後の6時～9時、夏休みなどは水曜日の午後、休館日を返上しての観賞会、既に9回開催されていますが、感動したり、共に涙を流しながら、映画観賞を親子や友達と共有出来るところに、意味があると思います。大人になった時に、ここでの映画観賞が心に必ず残ると思っています。

3、博物館「こどもボランティア」への参加。自発的に博物館周辺清掃奉仕（特に落ち葉掃き）など時折見ることが出来ます。この芽は潰さないように誉めています。

4、「こどもの居場所づくりプログラム」の提供。パソコンをエントランスに備えました。現在4台ありますが、うち2台は町内の芦沢健拓さん、小林正彦（六郷町）さんから寄付して頂きました。こどもがいつでも自由に使えます（写真右）。

5、誰でも参加出来る「砂金掘り大会」、第1回は下部町の児童の参加が多かったようです。みんな真剣に競技や審判員（計測）として、頑張ってくれました。

6、町内外の小・中学校の金山博物館への利用が増え続けています。博物館は下部町のみならず広域的な機能を発揮してきました。

③下部町の「顔」「名刺」としての博物館

下部町へ訪れる多くの方が博物館へいらっしゃいます。そこで受ける印象が下部町の印象です。私たち博物館や職員は、下部町の「顔」であり「名刺」と心得ています。下部町へきたお客さんが「良い印象」をもつか「悪い印象」をもつかもここでの対応次第です。

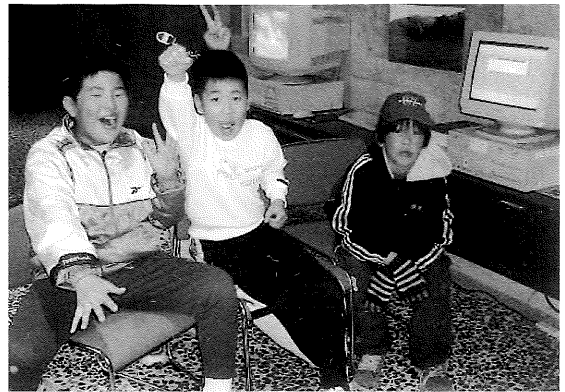
また、来館された皆様のニーズが満たされるよう、また、どれだけ満たされたか、いつも心がけ運営しています。

1、来館者の多くの方々は、下部町にこんな「歴史を持った金山があったことに驚き」、また「博物館」が町営であることを知り、「下部町ってすごいところですね」という答えを返してきます。下部町民の誇りです。

2、また来ますよ。そういう来館者が大勢います。

3、こうした小さなことが、下部町の活性化につながっています。

4、町民の皆様は、もっともっと「下部町の自然遺産」「歴史遺産」を自慢してください。自慢出来る素材はたくさんあります。お金をかけずに町の活性化が図れます。町民が良いと思わないところへ、誰が来るでしょうか。子供にも夢を持たせることが大事です。活性化の第一歩は、あなた自身の意識一つです。



④下部町の観光の拠点としての博物館

湯之奥金山博物館は、下部町の観光の拠点です。湯之奥金山の歴史事実が公開され、多くの来館者の知的好奇心のニーズに応えています。学術的な基盤を持った博物館ですから、数次にわたる来館者を呼び込めます。事実そういう来館者が増えています。

仮に金山博物館がなかったらどうでしょうか。火が消えたようになるでしょう。

約1000年の歴史をもつ「下部温泉郷」、それに金山遺跡、金山博物館は下部町の「宝」です。

⑤夢をもとうよ！…

湯之奥金山の「世界遺産」登録へ向けて……

1、湯之奥金山は「世界遺産」登録に相当する歴史遺産です。

2、西日本の「石見銀山」がこのほど「世界遺産」予備登録となりました。

3、東日本の「湯之奥金山」には、それに匹敵する重みがあります。

4、その「歴史事実」を伝えている湯之奥金山博物館の存在が重要な要素になります。

5、「世界遺産」登録のメリットは図り知れないものがあります。

6、「夢」を子供に受け継がせることは大事なことです。

7、下部町に誇りを。

活動報告

1 第1回砂金掘り大会開催!



11月23日(金)、「第1回砂金掘り大会」が開催されました。この大会は、既に産金に縁のある各地で行われている「世界砂金掘り大会」や「全日本砂金掘り大会」の公式ルールに沿って開催した博物館独自イベントで、県内外から約50人の参加者が集まりました。当日は「勤労感謝の日」で秋の3連休の初日ということもあり、会場となったりりバーサイドパークの人出は、博物館の連休の賑わいにさらに花を添えてくれました。

競技は、バケツの砂の中に決まった数だけ砂金が混入されており、その砂金をいかに早く正確に採取するかを競うものですが、今回は小学校、大人女子、大人男子の3部門で行いました。

砂金採りが全く初めての人、何度も経験のある人など様々でしたが、当日少々寒かったことをのぞいては、皆さんイベントを十分楽しんでくれました。各部門優勝者から第3位までにはそれぞれ賞品が谷口館長より手渡され、その他すべての参加者の方々には参加賞が渡されました。

今回は博物館としても初めての行事でしたが、印象的だったことは、町内の小学生が選手として、また審判員(タイム係)として率先して参加したことです。地域社会において大人と同様に一つの役割を持つことを知る、この事がこの行事の大事なところでしたが、結果は上々でした。参加された皆さんの協力を感謝いたします。

大会結果は次のとおりとなりました。

第1回 砂金掘り大会順位

*子供の部

順位	名前	個数	タイム
1位	木内 かな(常葉)	9個	13分43秒24
2位	佐野 まちこ(下部)	9個	15分20秒56
3位	桐戸 寛 顕(三沢)	8個	24分35秒59
4位	小林 まい(常葉)	8個	26分 5秒46
5位	望月 ゆき(下部)	7個	24分13秒16
6位	中沢 まい(常葉)	7個	29分20秒11
7位	日向 夏美(車田)	7個	32分36秒59
8位	小林 沙 樹(車田)	7個	32分49秒22
9位	岩松 匠(常葉)	7個	35分
10位	古屋 ひなこ(常葉)	7個	35分 4秒35
11位	佐野 はるか(下部)	6個	33分23秒47
12位	桐戸 千 佳(三沢)	6個	35分21秒 6
13位	二宮 しおり(車田)	6個	39分17秒37
14位	望月 晶 太(三沢)	6個	40分41秒21
15位	依田ひろまさ(常葉)	5個	32分24秒18
16位	植田 緑(甲府)	5個	34分42秒18
17位	切金 みなみ(常葉)	5個	45分19秒33
18位	岩松 芽 衣(常葉)	4個	38分58秒 3
19位	小林 飛 輝(車田)	4個	42分25秒28
20位	望月 香 里(石和)	4個	50分
21位	木内 翔(常葉)	3個	44分 8秒37
22位	河西 美 歩(石和)	3個	45分58秒
23位	河西 佑 哉(石和)	3個	47分44秒19
24位	小林 夏 妃(車田)	3個	53分52秒28
25位	望月 美 里(石和)	3個	57分
26位	高野 里 穂(下部)	2個	44分15秒30

*女子大人の部

順位	名前	個数	タイム
1位	小山 恵子(町田)	10個	6分21秒 8
2位	植田 めぐみ(甲府)	10個	15分46秒 3
3位	岩松 一 恵(常葉)	10個	16分25秒31
4位	小林 敏 子(車田)	10個	16分27秒34
5位	井村 智子(千葉)	10個	17分 6秒16
6位	遠藤 歩 美(横浜)	10個	17分38秒44
7位	遠藤 明 美(横浜)	10個	17分45秒 9
8位	望月 美 香(石和)	7個	20分47秒38
9位	河西 美 恵(石和)	0個	70分 1秒 2

*男子大人の部

順位	名前	個数	タイム
1位	高岡 伸 五(富士宮)	8個	7分38秒47
2位	岩松 満 登(常葉)	8個	9分10秒21
3位	石部 直 樹(下部)	7個	9分51秒38
4位	植田 伸 一(甲府)	7個	12分23秒12
5位	本間 純(千葉)	6個	14分43秒56
6位	望月 雅 弘(石和)	5個	8分59秒22
7位	赤池 一 博(下部)	5個	7分28秒 6
8位	河西 浩(石和)	3個	11分59秒53

2 平成13年度公開講座

今年度も恒例の公開講座が開催されています。昨年の9月から月に一度行われている今講座のテーマは「金山衆の産金技術を探る～粉成・比重選鉱・灰吹・色揚げの理論と実際～」、言わば実験考古学講座です。

9月の第1回目は谷口館長の湯之奥型から黒川型、定形型鉱山白のそれぞれの特質と実際についての講義、10月は、北海道留萌市の斎藤勝幸先生による砂金採りの実践講義（写真）。11月は伊藤博之先生による灰吹法の実験講義、そして12月に色揚げの実験講義をしていただきました。伊藤先生には2回に渡って講演していただきました。

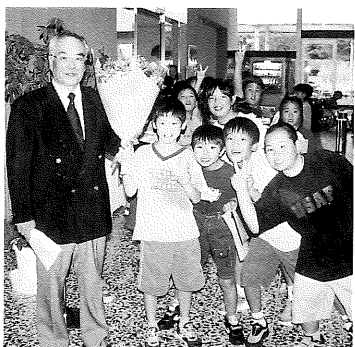


今講座では遠く県外からの聴講生が多いことが、特徴です。すでに4回目を数えている公開講座は、残すところあと1回。1月19日が今年度の最終講義となりますので、ぜひ御聴講にいらっしやってください。

有料入館者8万人目は矢野君(山梨県)

いよいよ行楽シーズンを迎え始めた10月2日、8万人目の有料入館者を迎えることが出来ました。有料入館者8万人目となったのは、県内御坂町の御坂西小学校に通う4年生の男の子でした。

この日、御坂西小学校4年生のみんなは、担任の先生の引率で、秋の遠足のため博物館に来館しました。エントランスで礼儀よく整列した中で、約40人の児童一人ずつに入館チケットが手渡されました。「この穴なあに？」とチケットを不思議そうに見て少しザワザワとしていた児童たちでしたが、谷口館長から、この館では今日8万人目の入館者を迎えること、その8万人



人目がこの中にあることを告げられ、「みんなが今持っているチケットで“80000”という数字が打ち込んであるチケットを持っている子は前に出てきて

ください」と言われると、さらにザワザワ。「あー、惜しい」「もうちょっとだったのに」という声に混じって、「矢野、矢野」と呼び掛ける声にせかさされ少し照れ臭そうに出てきた男の子は、矢野圭一君。

矢野君はクラスメイトの拍手と歓声の中で谷口館長から入館記念証とその他記念品、花束を手渡されました。他の皆さんには自分のチケットを砂金入りしおりにパウチしたものをお土産としてお渡ししました。

その後みんなは館内見学、砂金採り体験を楽しみましたが、その中で矢野君は「びっくりしたけど、嬉しいです。でも砂金採りは難しかったです。」と感想を述べてくれました。

帰る時にも、みんな礼儀正しく「ありがとうございました」、「また来るね」と元気良く博物館を後にしましたが、その後、言葉通り御坂西小学校のお友達が何人も来館してくれています。

館では後日、矢野君に渡したものと同じ金箔記念入館証を「御坂西小学校4年生殿」として御坂西小学校へお届けしました。

3 第9回親子映画観賞会

10月27日（土）、親子映画観賞会が開催されました。上映作品は「ドラえもん～がんばれジャイアン～」 「チキンラン」の2本。前回の映画会が台風のため中止になってしまったので通算10回目、実質9回目となりましたが、回数を重ねるごとに顔見知りの人が増えいき、最近では博物館に来た子供たちから「次は、

映画会いつするの？」と聞かれるなど、この催しが確実に浸透していることを伺わせます。

4月から学校は完全週休二日制になりますが、子供たちの居場所作りのためにも出来るだけみんなの希望に応じていきます。

今回は春休み、3月22日（水）午後1時からを予定していますので、楽しみにしててください。

硬い鉱石の粉碎作業に使用した鉱山臼が鉱山経営にとって必須の道具であることはいまでもありません。戦国時代から江戸時代全般を通して使用された鉱山臼は現在も各地の鉱山跡から出土していますが、地域・時代によってそれぞれ特徴ある臼が出現しており、それらは大きく湯之奥型、黒川型、定形型の3タイプに分けることができます。挽き臼の中でも湯之奥金山の「湯之奥型」と、黒川金山に代表される「黒川型」は、全国の鉱山臼の先駆けとなり、江戸期以降は定形型挽き臼が全国的に展開しました。したがって各地で発見されるその多くが定形型です。前回このページで述べましたが、当館収蔵品の上臼128点のうち、112点がこの「定形型」に分類出来るものです。いかに「湯之奥型」や「黒川型」が希少なタイプであるかがこの数字から垣間見ることが出来るのではないのでしょうか。

回転臼は上臼と下臼の磨り面中央に軸を立てて上下を固定し、回転させて鉱石を粉碎します。上臼には供給口と呼ばれる、鉱石を磨り面に落とすための穴が別に設けてありますが、湯之奥型はこの供給口が中心から外れたところにあります。湯之奥型は穀臼が原形だったのではないかと考えられる所以はこの供給口の位置にあります。口が中央よりずれた位置にある場合、あまり細かくならないまま鉱石がすぐにこぼれてしまうという不具合が生じます。そこで「磨り臼」が補助的に使われた可能性もあります。

黒川型は、中央に供給口を設け、軸穴と共有したため、使用済みの上臼には供給口内側に不規則な軸の削痕が残されています。

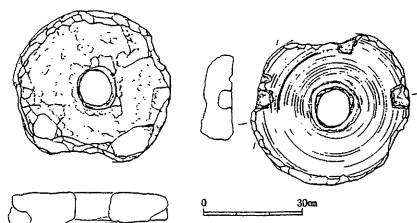
湯之奥型、黒川型の不備をすべて改善したのが定形型です。中央に設けられた供給口の内部にリンズと呼ばれる木製の道具をはめこみますが、前者2種

との大きな違いは、この「リンズ」を使用するとうちに尽きます。また、直径も湯之奥型や、黒川型と比べ比較的大きめのものが目立ち、より鉱石を砕くのに適した形に変化していったことが推測されます。（「金山史研究2」今村啓爾氏「甲斐黒川金山と鉱山の考古学」参照）

近年の鉱山研究の活性化に伴い「これまで見向きもしなかった庭の敷き石がよく見たら臼だった」とか、「臼だとは分かっていたけれど漬物石にちょうど良かったので使っていた」となどという話を耳にすることがあります。そんな風に発見された臼も含めて全体を見ると相当な個体差が見られ、今後3タイプをさらに細分類してみる必要性があります。3タイプの、より詳細な形態分類を進めることは鉱山臼について興味の尽きない点でもあります。科学として金山遺跡（鉱山技術）を捉えていくうえで欠かすことの出来ない大切な視点です。

さて、当館では今年の夏、親しむ博物館づくり事業「こども金山探検隊」の中で、子どもたちに挽き臼を実際に挽いてもらうために湯之奥型、黒川型、定形型の3種類の回転臼と、磨り臼の全部で4つの鉱山臼を復元しました。もちろん当時と全く同じ条件というわけにはいきませんが、ほとんど同条件で鉱石を挽き比べてみた場合、最も効率的に鉱石を砕くことが出来たのは定形型でしたが、使い易さから考えると、黒川型が一番良い感じがしました。黒川型は軸が安定していないため、鉱石が中で目詰まりしにくいという点が使い易さを感じる理由です。湯之奥型は効率の面でやはり定形型に劣っているようです。見るだけではない実験考古学で得られた成果です。

今回は、収蔵品から定形型挽き臼を1点紹介します。（学芸員 小松美鈴）



定形型上臼（収蔵番号 113）

直径49cm、重量23kg、供給孔も直径10~12cmあり大型。柄溝が3箇所あるが、過度使用の結果いずれも磨り面に柄溝面が露出している。露出後もしばらくは使用されたいが、磨り面断面を見ると、下臼の軸山に似た盛り上がりがある。柄溝は表面からいずれも4~5cm下にあり、同じ高さに設けられていることから順次設けたのではなく当初から3か所存在していたと思われる。

残存率 92%
直径 49cm
厚さ 8.5cm
重量 36kg
供給孔 10~12.3cm
供給孔深さ 8cm

私の研究ノート⑧

「志村甚之助証文」再考

高岡 伸 五 (湯之奥金山博物館友の会会員)

「私の研究ノート」⑥(館だより第17号)で、慶長7年(1602)に徳川家康の家臣志村甚之助が調べた中山・富士麓両金山の掘間の記録にある掘間(こさいく)の宮内左衛門について触れましたが、実は、その竹川家文書(写真)には、もっと重要な内容があるのではないかと山梨県史編さん室の堀内亨先生からご指摘を受けました。

金山博物館において堀内先生、谷口館長と同席させて頂き、種々お話を伺いましたが、この竹川家文書「志村甚之助証文」からは、まだまだいろいろな史実が見えてくるのではという、その指摘された部分について今回触れてみたいと思います。

この「志村甚之助証文」は、湯之奥中山金山と地蔵峠を挟み隣接する富士(麓)金山の間歩の管理を駿河国代官井出正次が竹川甚八郎に命じた文書として理解されてきたものですが、内容を見ますと、文書の書き方、読み方によって別の意味が出てまいります。

掘間「雪窪」における「中山分と富士山分」

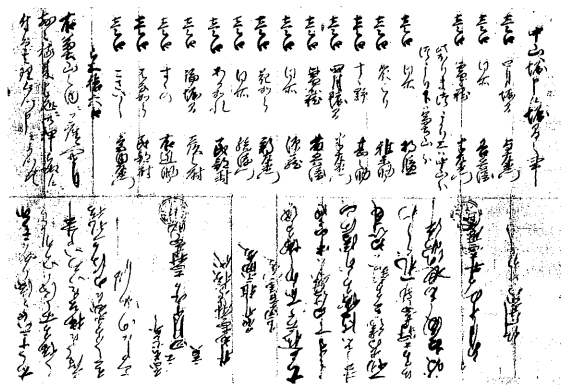
これまで中山分の掘間3口、富士山(麓)分の掘間13口、計16口と解釈されてきていましたが、その根拠は、文書に見られる間歩の3口目(雪窪・半左衛門)と4口目(同所=雪窪・將監)の間に書かれている「此ほりまつ、つより上は中山分、つより下は富士山分」の記述が根拠になっていました。

しかし、これは「雪窪」という「掘間」だけに対して、つ、(井戸)から上と下で分けたもので、全体に関わるものではないという新たな見解です。

文書の書き方も間歩一つを分けた書き方で、もし、全体であればもっと上から書き出すもので、これは明らかに間歩一つを分けたもの。そういう見方ができるというご指摘です。

すると、これまで中山3口、富士(麓)13口といわれてきた間歩主の在り方に再検討が迫られます。

場合によればすべてが中山金山の間歩ということになります。



慶長7年(1602)4月19日 竹川昭司家文書

『中山へ堀申候掘間之事』

で、この「志村甚之助証文」の内容は、『中山へ堀申候掘間之事』とありますから対象の間歩は『中山』の金山のことと思われます。

この文書が『中山』の金山衆に宛てたものか、『富士(麓)』の金山衆に宛てたものか、あるいは双方の金山衆に宛てたものか、この部分が明確ではありませんが、可能性とすれば中山金山の掘間の一つ「雪窪」を上下2つに中山と富士分に分けていますから、双方の金山衆が既に中山金山へ入っており、その全体を対象にしているように思われます。

しかも、この文書の井出正次裏書きによると、これらの中山金山の間歩支配を竹川甚八郎に命じたことで、中山金山の在り方に大きな影響が出てきます。

駿河国でいう富士(麓)金山の範囲に中山まで含まれていたかどうか、またこの「志村甚之助証文」の19年前には中山の金山衆「河口六左衛門尉」が間歩を所有していたことは他の文書で明らかですが、この「志村甚之助証文」には既に間歩主としての名前は消えています。

その、中山の金山衆「河口六左衛門尉」の子孫の市郎右衛門が門西家文書に「内山の市郎右衛門」として登場するのは、「志村甚之助証文」から数えて89年後のことです。

竹川家文書である「志村甚之助証文」を再検討する必要が出てきたといえます。

館からのお知らせ

1. 平成13年度公開講座最終講義のお知らせ

第25回 公開講座

平成14年1月19日(土)

「文献に表れた甲州金と現物貨幣」

早稲田大学/白梅学園短期大学非常勤講師 西脇 康

会場 湯之奥金山博物館 多目的ホール

(JR身延線下部温泉駅下車)

時間 午後2時～4時

受講料 無料

2. 金山史研究第3集発刊のお知らせ

県内外に広く浸透している公開講座ですが、博物館では講座記録集「金山史研究」として刊行しております。

今般、講師の先生方の御協力と承諾を得て発刊準備を進めているのは、平成11年度に実施された公開講座(5回)及び記念講演(2回)の7回分です。

詳細は次のとおりですが、不明な点は博物館までお問い合わせください。

◎書名 金山史研究(第3集)

—平成11年度記念講演と公開講座の記録—

◎体裁 A4版120ページ

◎定価 1,200円

◎発売予定 平成14年3月下旬

◎掲載内容

公開講座

「鉱山技術史に見た湯之奥金山遺跡

～初期金山の仕法～

金属鉱山研究会会長 村上安正

「佐渡相川金山にみる鉱山技術

『水揚げ』～民俗学的考察～

佐渡相川郷土博物館学芸員 柳平則子

「古代中国・中世ヨーロッパの鉱山技術

～文献考察と視角～

金属鉱山研究会会長 村上安正

「兵庫県妙見山麓遺跡に見る精錬遺構と技術

～考古学調査から～

妙見山麓遺跡調査会調査主任 神崎 勝

「奥州と北海道の産金技術」

岩手県埋蔵文化財センター調査第二課長

高橋與右衛門

記念講演

「岩手の金山 大槌町金沢金山の例」

元岩手県大槌町文化財保護審議会会長 花石公夫

「湯之奥金山と門西正勝家文書」

山梨県史編さん室主任 堀内 亨

3. こども体験用パソコン設置

コンピューターに気軽に触れて親しむことが出来るよう、誰でも自由に使用出来るパソコンをエントランスに4台設置しました。

うち2台は先般、谷口館長が教育フォーラムでの講演の中で「生涯学習機関としての博物館」につい

て話したことに共感いただいた、町内在住の芦沢健拓さん、それに小林正彦さん(六郷町)から寄贈していただいたものです。使用したい方は気軽に申し出てください。

みなさん、大事に使ってください。

編集後記

お正月気分にも一区切りといったところでしょうか。いよいよ2002年がスタートしました。

今年は博物館も開館6年目を迎えます。職員一同気を引き締め、新たな気持ちで運営、各種事業に取り組んでいく所存ですので今年もよろしくお願いたします。

博物館だより

第19号

平成14年1月14日

発行 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
TEL 0556 (36) 0015
FAX 0556 (36) 0003

博物館ホームページアドレス <http://www.2.town.shimobe.yamanashi.jp/kinzan/>

博物館Eメールアドレス kinzan@town.shimobe.yamanashi.jp